
バカと忍と召喚獣

ふりたー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと忍と召喚獣

【Nコード】

N5628Y

【作者名】

ふりたー

【あらすじ】

革新的な学力低下対策として『試験召喚システム』を初めて導入していた文月学園。そこで個性的なメンバーと転校生の主人公のお話

プロローグ（前書き）

はじめまして「ふりたー」です。よろしく願いします
処女作なので頑張っていきたいです
タイトルは仮なんで変わるかもしれません

ブローグ

文月学園

この学園には科学とオカルトと偶然により完成された『試験召喚システム』なるものがある。

『試験召喚システム』とは、テストの点数に応じた強さを持つ『召喚獣』を呼び出して戦うことができるらしい。謂わば、使い魔のようなものか？と俺は認識している。

学力低下が懸念される昨今、生徒の勉強に対するモチベーションを高める為提案された先進的な試み。

その中心にあるのが、『召喚獣』を用いたクラス単位の戦争――

――『試験召喚戦争』というものだ。

『試験召喚戦争』というのは…まあ詳しい説明は後でもいいだろう。

なぜ説明口調なのかって？

それは、俺はこの学校の転校生として2年生から通うための確認みたいなものだ。

とりあえず、楽しい学園生活を送れればいいかなーと気楽に構えてようと思う。

学園へと続く道の両脇には新入生を迎えるかのように桜が咲き誇っている。

柄にもなく見惚れながら歩いていたが、玄関前に辿り着いた時に思わず歩くのを止めてしまった。

なぜなら、その桜よりも印象強いものが目に飛びん込んできたからだ。

「お前が今日からこの学園へ通う服部正吾か？」

「ッ！はい、今日からこの学園へ通うことになってる服部正吾です」

返事に躓いてしまった俺は悪くないと思う。

目の前にいる男性は浅黒い肌した短髪のいかにもスポーツマン然とした男が立っていた。

その姿はまさに筋肉隆々という言葉がふさわしいだろう。多少、話には聞いていたが想像以上であった。

「そうか。俺の名前は西村宗一だ。何か分からないことがあったら俺に言うなり他の先生に言うなりしてくれ」

「よろしく願います。鉄じ————西村先生」

まずい。思わず西村先生の渾名である『鉄人』と呼ぶところであった。

鉄人、鉄人と何回も聞かされていたら思わず言っちゃいそうになるよね！

「今、鉄人って言わなかったか？」

「ははっ。気のせいですよ」

「なぜお前が俺の渾名を知っているのか・・・まあいい、学園長室に案内するから付いてこい」

ちなみに鉄人というのは西村先生の渾名で、その由来は先生の趣味であるトライアスロンが関係しているとのことだ。真冬でも半袖でいるあたりも理由の一つらしいが。

つと、いつまでも西村先生の事を説明していても意味はないと思い、西村先生の後を追ったのだった。

ブローグ（後書き）

誤字脱字等ありましたらご指摘お願いします
批判等はやさしくがいいです（チラッ

キャラ紹介（前書き）

主人公の説明です

チラッと名前出ましたが詳しいことを

キャラ紹介

キャラ紹介

名前 服部正吾 はうとりしょうご

身長 175 cm 体重 50 kg 誕生日 7月7日

趣味 ゲーム関連 情報収集 悪戯

特技 両利き 隠密行動 家事全般 武術？

その他

黒髪黒目 若干吊り目 髪はちよつと長い 女装が似合う
性格は飄々としていて面白い事を常に待ち望んでいる。

身体能力は異常に高い。鉄人とは互角でやりあえる。頭も良いがたまにぬけている。

一人暮らし ムツツリー二とは転校前からの親友
気分転換で伊達メガネを着用したりする

召喚獣

ムツツリー二と似たような忍者衣装

武器は手裏剣やクナイなど様々

特殊能力は未定で

キャラ紹介（後書き）

変更するかもしれませんが基本的にはこっぴつ感じですよ

第一問

side 正吾

俺は西村先生と共に学園長室へ行き挨拶を済ました。と言っても既に何回も会ったことあるしね！

口の悪さは相変わらずだったよ全く。けど元気なのはいいことだよ、うん。

バアさんとの会話なんて誰得だしね？割愛させてもらうよ。

その後は職員室で挨拶したよ。ちなみに俺はFクラスって事で今は担任の福原慎先生とともに廊下を歩いている。

途中、Aクラスを覗いている生徒がいたが何かを思い出したかのようになんて小走りで行った。

その生徒の行き先は・・・Fクラスじゃないか。それに情報で見たことのある顔だった。

彼が例の『観察処分者』なのかな？なんて考えていると

「服部君？どうかしましたか？」

と、福原先生に声を掛けられた。緊張してる？なんて思われているのかね。

とはいえ心配してくれるだけありがたいので、大丈夫です。と答えとく。

そんなこんなでFクラス近くに来たんだが、「ウジ虫野郎」とか「このクラスの全員が俺の兵隊だ」なんて聞こえてくる。

なんて会話だろうか？しかしなんだかオラ、ワクワクしてきたぞ！

side 明久

二年F組と書かれたプレートのある教室の前で僕は少しだけ躊躇していた。

悪い考えが脳内を駆け巡ったが考えてても仕方ない。

これから共に過ごす仲間たちを信じよう。

そう思つて、僕は勢いよくドアを開けてから中の皆にできる限りの愛嬌たつぷりに言い放った。

「すみません、ちょっと遅れちゃいました」

「早く座れ、このウジ虫野郎」

台無しだっ！

「聞こえないのか？ああ？」

なんて失礼な教師だろうか。そう思い僕は教壇に立っている男を見た。

そこに居たのは、僕の悪友、坂本雄二だった。決して教師ではない。

「……雄二、何やってんの？」

聞いたことのある声だなあ、なんて思ったけどまさか僕の悪友が教壇でいきなり罵声を浴びせてくるなんて普通は考えられない……いや、雄二ならあり得るかと思っっていると

「先生が遅れているらしいから、代わりに教壇に上がってみた」

「先生の代わりって、雄二が？なんで？」

「一応このクラスの最高成績者だからな」

「え？それじゃ、雄二がこのクラスの代表なの？」

「ああ、そうだ」

ニヤリと口の端を吊り上げる雄二。その言葉を聞いて思わず顔が綻ぶ。

つまり雄二を説得すれば、このクラスを動かせるって訳だ。

「これでこのクラスの全員が俺の兵隊だな」

ふんぞり返って床に座っているクラスメート達を見下ろしている雄二。

——そう、クラスメートは皆床に座っている。

どうしてか？その理由は簡単。椅子が無いからだ。

「それにs……………転校生が来るらしい」ホントかい！？ムツツリーニ！？」

突然会話に入り込んできた彼は土屋康太。小柄で口数が少なくおとなしい人物だ。運動神経はいいのだがあまり目立たない。やっぱり目立つとやりにくいのかな？いろいろと。

だが、今はそれどころじゃない！転校生の情報だろう！

「ムツツリーニ！転校生は女の子！？女の子だよね！？」

「うるさい黙れ明久。して、康太。その転校生の情報は？」

「……………なぜか情報がブロックされていた」

「その程度、いつもみたいに解除出来ないのか？」

「……………すまない。想像以上に強敵だった」

「…そうか、ありがとな」

そういい、雄二は考え事をし始めた。こういう時の雄二は何を考えている分らないので無視して空いてるスペースに座るのが得策だろう。

「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

その時、不意に背後から覇気のない声が聞こえてきた。そこには寝ぐせの付いた髪にヨレヨレのシャツを貧相な体に着た、いかにも冴えない風体のオジサンがいた。

「それと席に着いてもらえますか？HRを始めますので。あと、転校生の紹介をしますので」

一体、どんな人が来るのだろうか？

第一問（後書き）

主人公がFクラスとかはご都合主義ってやつでお願いします

第二問（前書き）

やつと主要キャラとの絡みが多少

第二問

side 正吾

福原先生に「しばらく待機しててください」と言われて待ってるんだけど緊張しちゃうぜ！

ファーストコンタクトは重要やん？ここで滑ったら楽しい学園生活は送れないと思うかも！

そんなことを考えていたら呼ばれたみたいなんで逝ってくる（ギリッ字が違うつて？気にしたら負けだぜ、うん。

「転校生の服部正吾くんです。どうぞ」

「どうも服部正吾です。趣味は盗さ…なんでもない。特技は盗ちよ…なんでもない。よろしくお願いします」

フツ…我ながら完璧な自己紹介だった。この挨拶ならアイツは気付くだろう。

「…ッ！」

視線をそちらに向けるとやはり気付いたようだ。さすが俺の親友…もとい相棒か。

席は自由らしいので俺はその顔なじみの元へと向かったのだった。

side ムツツリーニ

……担任の福原先生が転校生が来ると言っていた。この俺が情報を得れなかった転校生。凄く気になる。

そして、教室に入ってきた男を見た時に俺は目を疑った。

「どうも服部正吾です。趣味は盗さ…なんでもない。特技は盗ちよ…なんでもない。よろしくお願いします」

……ッ！この挨拶にあの顔、そして声。間違いなくアイツだろう。道理で情報が得られなかった訳だ。

どうせ自己紹介に満足してるのだろう。ソイツは少し顔を綻ばせながらこちらにやってきた。

side 正吾

俺の自己紹介が終え、クラス内で自己紹介があるらしいがあらかじ

め調べてあるから確認程度でいいだろう。それよりも楽しみな事があるしな。俺は声を潜めつつ隣の親友に話しかけた。

「よう、康太。久しぶりだな。1年ぶりか」

「……………久しぶり正吾。大体そのぐらい」

変わってないな相変わらず。だが、それがいい（キリッ
まあそれはいい。唐突だが本題だ。

「…この学園に仕掛けられてるカメラや盗聴器はお前のか？」

「……………流石。バレないと思っていたが」

やはりか。康太以外でこの手の事の高スキルが奴は情報になかったからな。

「いや、俺も気を抜いていたら分からなかった。前より腕を上げてるな」

「……………当然。日々の精進」

「さすが相棒。ところで放課後時間あるか？」

「……………あるが？」

確認も取れた事だし、乗ってくるだろうと確信し俺はニヤリとしながら言う。

「この学校の案内してくれない？それに…1人より2人の方が捗るだろう？」

「……………もちろん」

俺は満足し御礼を言う。ちなみにこの話の途中で康太は自己紹介を済ませている。

途中、「ダアアーリーーン!!」なんて大合唱が聞こえてきたが無視だ。

皆の紹介が終盤に差し掛かった頃、不意に教室のドアが開き、息を切らせて胸に手を当てている女子生徒が現れた。

「あの、遅れて、すいま、せん…」
「えっ？」

教室全体から驚いたような声上がる。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので、姫路さんもお願いします」

「は、はい！あの、姫路瑞希と言います。よろしくお願いします…」

途中から声のトーンが下がる。そりゃ途中から来たわけだし、男ばかりだし仕方ないだろう。

「はいっ！質問です！」

「あ、は、はいっ。なんですか？」

「何でここにいますか？」

聞き様によつては失礼な質問だが仕方ないだろう。彼女は本来Aクラス上位の実力を有しているからだ。

「そ、その…」

「振り分け試験の最中に高熱を出してしまいました…」

その言葉を聴き、クラスの連中は『ああ、なるほど』と呟いていた。そんな彼女の言い分を聞いてか、クラス内でもちらほらと言いつの聲が聞こえてきた。

『そういえば、俺も熱一（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ。化学だろ？アレは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大ウソをありがとう』

想像以上に面白そうなクラスだなと実感したよ。

「で、ではっ、一年間よろしく願いしますっ！」

そんな中で彼女は逃げるように吉井ダイリンと代表の隣の空いてる卓袱台に着こうとしていた。

吉井は見ただけでもドキドキしているのが分かった。あれほど分かりやすい奴も珍しいだろう。

彼らが話し始めた姿を見てか、クラス内でもチラホラとそちらを意識している者が多数いた。

そこで俺は気付いてしまったんだよ…

俺、転校生なのに目立ってなくね？

いや、別に仕事柄もあるし性格もあまり目立ちたがりじゃないけどさ、多少は注目度があってもいいんじゃないかなあ（チラチラッ

「……………なんで俺は注目されないの？って顔をしてる」

さすが康太。よくわかってるじゃないか。
べ、別に悲しくなんかないんだからねっ！

第三問（前書き）

短いですがどうぞ

第三問

俺がさつきまで寂しい思いをしてたらな、教卓が机がゴミ屑になっただよ。

なにを言ってるかと思うが俺もよく分からない。

ただ、簡潔に言うとな先生が軽く叩いたら崩れ落ちたんだ。

ちなみに、説明してなかったがFクラスだけあって設備がボロい。上のクラスに行けば行くほど設備が良くなるって仕様だ。

「えゝ…替えを用意してきます。少し待っていてください」

福原先生が気まずそうに告げて、教室から出て行った。

全くなんて面白い学校だ。

なんて、思っていると吉井と坂本の二人が立ち上がって廊下へ出て行った。

大方、試召戦争のことではないかと俺は考える。代表の坂本は血気盛んそうだしな。それに神童だったらしいし勝つ策でもあるのだろう。それに吉井も何か思うような事がある顔をしていたし。

思わず顔が口角が吊り上ってしまうぜ

「……………悪い顔してる」

「そりゃそうだろう。初日から面白いことになりそうだぜ康太」

「……………?」

「恐らくだが、うちの代表サマは初日に戦争の引き金を引くと思うぜ」

Dクラスになど付け加える。そうしていると話していた二人が戻ってくる。坂本の顔は僅かにだが楽しそうな顔してる。

先生が戻り教卓を替えて、HRが再開されて自己紹介の続きが始ま

った。まだ終わってなかったのか。
特に何も起こらず、また淡々として時間が流れた。

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」
「了解」

先生に呼ばれ、坂本はゆつくりと教壇に歩み寄る。
その姿はまさにクラスの代表として相応しい貫禄を身に纏っているように見える。

「坂本君はFクラスの代表でしたよね？」

その先生からの問いに、鷹揚にうなづく坂本。
そして、坂本は自信に満ちた表情で教卓に上がり、俺らの方に向き直った。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

俺は口パクで「キ・リ・シ・マ」と呟いたが伝わっただろうか。若干、顔が青ざめている様子を見ると伝わったのだろう。嬉しい限りだ。

「転校生、後でお話がある。それは置いて皆に一つ聞きたい」
坂本はゆつくりと全員の間を見るように告げる。
皆の様子を確認した後、坂本の視線は教室内の各所に移りだす。

かび臭い教室。古く汚れた座布団。薄汚れた卓袱台。皆の視線も坂

本の視線を追う。

「Aクラスは冷暖房完備な上、座席はリクライニングシートらしいが――」

「――不満はないか？」

「大ありじゃあっ!!」

これは二年Fクラスの魂の叫びであろう。

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『そうだそうだ!』

「いくら学費が安いからといって――」

とまあ、このように上手くクラスの意識をまとめ上げてるのは流石だな。

この様子じゃ、クラスをまとめ上げるには問題ないだろう。

だが俺が聞きたいのはそんなことじゃない。

「みんなの意見はもつともだ。そこで」

俺は話を聞いてなかったが堰を切ったかのように不満の声が出たのだろう。それぐらいは想像がつく。

坂本は級友たちの反応に満足したのか。自身に溢れた顔に不敵な笑みを浮かべて、

「これは代表としての提案だが――」

これから戦友となる仲間たちに野性味満点の八重歯を見せ、俺は次の言葉を待ちわびる。

「――FクラスはAクラスに『試召戦争』を仕掛けようと思
う」

Fクラス代表、坂本雄二は戦争の引き金を引いた――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5628y/>

バカと忍と召喚獣

2011年11月22日14時37分発行